
第5章 まとめ

1. 結果

フォワーダーが日本側の積出港、集荷倉庫、物流手段をどのような要素を判断し選定するか分かった。

フォワーダーは輸出する際の荷主（売り手、商社）と輸入する際の荷主（最終的に買い入れる事業者）が合意（契約）した総運送費込みの商品の価格に見合った輸送ルートを選定する。事前にフォワーダーには商社から物流経費の見積もり依頼があり、荷主（輸出者）はそれを元に輸入者と商品の売買価格交渉を進める。

輸入者が希望する物流センターへの到着日も重視される。本調査では、台湾全土で70店舗を展開するスーパー「松青超市」の関連卸会社の物流センターへは、月曜日もしくは火曜日の搬入が指定された。これから逆算し、基隆港への到着日が週末にダイヤが組まれている東京港が選択された。利用したコンテナ船は、船社；エバーグリーン、船名「UNI-PATRIOT」、東京港発～基隆港であった。

本調査対象である日本製冷凍和菓子と日本製水産加工品がスーパーの新規オープンに合わせた目玉商品となっていた。実際にはスーパーの開店予定が1ヵ月ほど遅れ、それに対応したスケジュールが再び組まれた。食品加工メーカーの工場が岩手、宮城の両県であること、京浜地区の冷凍倉庫が満庫に近い状態で、なおかつ日中は港湾道路の渋滞が予想されたため、コンテナヤードに近い保税冷凍倉庫を多く構える東京都大井ふ頭地区に商品が集荷された。

八戸港についても検討されたが、利用されなかった。リーファーコンテナ対応の電源設備の空き状況では問題なかったが、八戸港に空の20FTフィーファコンテナがなく、最も近くて京浜から八戸まで空のコンテナを陸送しなければならなかった。それに係わる費用は海上運賃の50%近い金額が見積もられた。仙台港を利用しなかった理由には、やはり基隆港までの直行便がなく、荷主が希望する週の後半（木、金曜日）に基隆港に到着できない事情があった。

ナガイモについては、商品が生鮮食品であることから、荷主からはフォワーダーに対して物流品質の重視、産地の事情でフォワーダーが指定する倉庫への納品日が突然の変更することがありうるとの要望が出されていた。調査した9月のナガイモは、同年の春に収穫され土付のまま冷蔵庫で保管されたものである。秋掘り直前で、収穫されてから時間がたっていることから、産地で洗浄・箱詰めされてから1日も早く、台湾に届けたい理由もあった。

フォワーダーは、要望を考慮して台湾への直行便が多い横浜港を使う選択をした。

利用した船社は WAN HAI 船名「303 VOY」。

八戸港と仙台港については、冷凍加工食品のケースと同様に利用できなかった。

輸入業者の要望もあった。台湾で荷受する倉庫の事情で、手積みだと手下しする作業員を当日は用意できない可能性を考えてのことか、ナガイモを手積みでなくパレットでバンニング（コンテナ内への積込作業）するよう指示があった。20FT コンテナであれば手積みで、通常 700 箱は積み込めたところ、170 箱近く少ない 528 箱の量となった。その結果として、一箱当りの物流コストは 32%も高くなってしまった。

2. 今後の方向性

青森港のコンテナ航路の定期化を視野に入れた試験寄港を実施するには、フォワーダーの調整能力を最大限に活用し、輸出者（商社、メーカー）、輸入者（商社、実需者）の意向を可能な限り汲み取りやすい対象貨物を絞り込むことが第一に必要である。すなわち、利害関係者にとって流通経路の変更にとまなうデメリットが少ない貨物を選び出し、その商品（貨物）のマーケットがある国への輸出する姿を描くことである。

例えば「生産地」として津軽エリアを見た場合、輸出貨物として、実績のある台湾向け青森県産のリンゴを在荷貨物とした試験寄港が考えられる。主に津軽圏から台湾向けに年間約 2 万トン、40FT コンテナ当たり 1000 箱・10 トンの積載で換算すると、2000 本／40FT の輸出実績があることが理由である。本調査で行ったナガイモも候補である。仕向け先がリンゴと同じ台湾で、確実なマーケットとして年間需要が 5000 トンあるからだ。

青森港から台湾へリンゴやナガイモの輸出を目的としたコンテナ船の試験寄港のスキームを構築することを提案したい。そのためには、詳細な事業化調査を行う必要がある。詳細とは、現在流通している青森県産リンゴの輸出の仕組みについて、日本、台湾の双方の現況を詳細に把握することである。日本国内の流通は県内のリンゴ生産者にもっとも近い移出集荷業者からはじまり、輸出商社から依頼を受けるフォワーダー、台湾側では食品スーパー、青果卸業者などの年間実需量、時期、仕入れ単価まで。ナガイモについても同様である。津軽地域への経済効果も忘れられない。これらを把握することによって、利害関係者間の調整に必要な費用を含めた条件・項目が明確になるのである。

現在の段階で青森港で可能な貿易業務について触れる。植物防疫所、税関、保税倉庫などの CIQ、リンゴの主産地である津軽エリアには最先端の選果システム、害虫除去システムが整ったリンゴ集荷会社の CA 倉庫が整っている。青森港で輸出商品の集荷、検疫、通関が可能であるということだ。荷役機械設備については、初期の試験寄港では必要ない。段階を踏んだ試験寄港のシミュレーションの中で必要にな

る時期を明確にすることである。

最後に、コンテナ船の試験寄港実施事業化調査の対象として台湾から輸入する商品の開拓も加えたい。二国間の商流が交互に行きかうことが、物流コストを低く抑えることが可能になり、さらに両国（県）間の信頼関係が深まり、人と人の交流につながるからである。